
夕子ちゃん

百倉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕子ちゃん

【Nコード】

N6634D

【作者名】

百倉

【あらすじ】

誕生日を迎えた一人の少女。お祝いをしてもらえる喜びでじっとしてられず、夕暮れ時になってから遊びに出かけてしまう。少女が向かう先はいつも遊びに行っている近所の空き地。そこでは夕子と呼ばれる少女がシャボン玉で遊んでいて…。

（前書き）

ホラーですが、グロ描写は無いです。じわじわとした恐怖を感じていただけたら成功です（笑）

「ねえお母さん。あのこまた来てるよ。ポニーテールの女の子」
「なあに？誰かいるの？」
「ほら、あそこ。公園の中だよ。シャボン玉で遊んでる」
「シャボン玉…？変ねえ、お母さんには見えないわ」

* * *

夕暮れ時。

一人の少女が家を飛び出して、楽しそうに鼻歌を歌いながら駆けていく。
ポニーテールの髪を秋の冷たい風の中で踊らせながら、長くのびた影と一緒に通りなれた道を走る。
住宅の間の道を通ると、夕飯の良い匂いが漂っている。
空は半分沈んだ太陽の光でまぶしいほどの朱色に染まり、流れる雲を紅く焦がしながら沈んでいく。

もう、日が暮れてしまう。

家族は、少女が出かけたことすら知らないだろう。まず、自分の子供がこの時間帯に一人で外へ出るということがありえない話なのだ。こんな時間になってから出かけるなど普段から言い聞かせている、ということもある。
親からの「いいつけ」を、うちの子供はちゃんと守れると信じていた。

しかし、今日は少女の誕生日だった。特別な日を家族がお祝いしてくれるということもあって、少女は胸を躍らせていた。いつもは帰りの遅い父も早く帰ってきてくれる。

ケーキだって、いつもおやつで食べている分より、少しだけだがたくさん食べて良いと言われた。

少女は嬉しくて仕方がなかった。気持ち之急いてじっとしてられない。

だから、ちょっとだけ外に出てみようと思った。

少女の向かった先は、自宅から少し離れた場所にある空き地だった。暗い影が濃くなってきている空き地の入り口に、シャボン玉が一つ飛んでいた。

少女はシャボン玉を見つけ、目を輝かせて空き地の方を見た。

「あ、いたー」夕子ちゃん」

「！」

空き地の真ん中に、少女と同年くらいの女の子がいた。

夕子と呼ばれたその少女は、遊ぶ手を止めて空き地の入り口のほうを振り返った。

肩からオモチャのような鞆を提げ、髪型はセミロングに近い。手にはシャボン液の入った容器を持っている。

少女の目的は、この女の子が持っているシャボン玉だった。

「また、一人でシャボン玉？」

「…うん」

「私にもやらせて」

「…やだよ。一人分しか持っていないもん」

夕子の素っ気無い言葉に、少女は気を悪くした。

子供らしく頬を膨らませて、夕子に詰め寄った。

「いいじゃない、ちよつと貸してくれたって。やらせてよ！」

「…どうして？」昨日もしたじゃない」

「とにかく貸してよ！」

「あっ…」

少女は強引に夕子からシャボン液の入った容器を奪った。

シャボン玉を作るためのストローも一緒に奪い、少女は早速シャボン玉を吹き始めた。

太陽はさらに沈んでいく。朱色に染まっていた空は徐々に群青色に変わり、東の方角から暗くなっていく。

家への道も空き地の辺りも、街灯のないところは薄暗く見えづらい。空がまだ明るいせいか、地上は余計に暗く見える。

それでも、少女は遊んでいた。シャボン玉を作っては飛ばして、一人ではしゃいで笑っている。

子供は夢中になると周りが見えなくなる。少女は遊びに夢中だった。

一方、遊び道具を盗られた夕子は、少女が遊んでいる様子をじっと見ていた。

傍目からみれば、早く返して欲しい、と言いたいようにみえる。しかし夕子は何も言わず、泣くことも怒ることもせず、ただその様子を見詰めていた。

その目は異様に潤み、怪しい光を放っている。同い年の少女の無垢な瞳とは思えないほど、濁った光だった。

夕子の視線の先には少女の姿が囚われている。二人の周りには、少女が作って飛ばしたシャボン玉がフワフワと頼りなく浮いている。それぞれのシャボン玉に、周りの風景が丸くゆがんで映っている。

闇に吞まれていく空き地、太陽が沈んでしまった後の空、瞬き始める星、一人はしゃぐ少女…。

シャボン玉の中に、夕子は映っていない。

「あれ？もうない…」

まだ少し明るさを残していた西の空が暗くなる頃、少女が持っていたシャボン液がなくなった。

少女は残念そうに容器を見詰めていたが、ふと家に帰ることを思いついて辺りを見回した。

見回して、ビックリした。

あまりの暗さに、少女は目を丸くした。こんな時間になるまで遊んでいたなんて、思いもしていなかった。

そのとき、少女の後ろから声がした。

「3回目だね」

夕子が、異様な笑みを少女に向けている。少女が作ったシャボン玉に囲まれて、不気味に笑っている。

「え…？」

「残念だね。今日、誕生日なのに。もう家に帰れないよ」

「帰れない…ダメだよ。私、お母さんに怒られちゃう…」

「大丈夫だよ。もう帰れないんだから、あなたは怒られないよ」

夕子は、いつの間にか落ちていたシャボン玉の容器とストローを拾い上げ、鞆に入れた。

風景を映しこんだシャボン玉に、少女の姿だけが映される。

「3回遊びに来てくれたおかげだよ。ありがとね」

「私、昨日は遊びに来てないよ？夕子ちゃんとだって、今日始めて会ったばかりなのに…」

「昨日が誕生日なら良かったのに。でももう手遅れ」

「さつきから何言ってるのかわからないよ……」

シャボン玉に映った少女は、全て同じ動きをしている。しかし、少女から見たシャボン玉には、夕子は映っていない。

「うふふ…これで私、あなたの代わりになれる。それじゃ、もう”
帰るから”。バイバイ」

夕子の周りに浮いていたシャボン玉が一斉に割れた。それと同時に、少女の姿も消えてしまった。

その場に残ったのは、一人の少女。夕子だけ。

少女がいなくなったことに気づいた母親が、空き地の近くまで探しに来ていた。

空き地の中に少女を見つけ、安堵の溜め息をついた。

「夕子！暗くなってから外に出ちゃダメだってあれほと言ったでしよう！？」

「ごめんなさい、お母さん。どうしてもシャボン玉で遊びたかったから」

母親が、目の前にいるこの少女を我が子でないと気づくことは、一生かかっても無理だろう。

もう我が子だった少女はこの世に存在していないのだから。

「それに今日は誕生日なんだもん。嬉しくって」

「しょうがない子ねえ。今日は特別に許してあげるわ。さあ、帰りましよ。お父さんも帰ってきてるわよ」

家に帰ると、待ちわびたように父親が出迎えてくれた。

「夕子！誕生日おめでとう！寒かっただろう。お父さん、プレゼント買ってきてやったぞー！」

「うわー、ありがとう!」

「もう夕子ったら、はしゃいじゃって」

そこには、絵に書いたような温かい家族の風景があった。その中の少女の瞳は、無垢で汚れない光を放っていた。

草木も眠る丑三つ時、誰もいない空き地にひとりの少女が立っている。

その少女は頼りない足取りでフラフラと空き地を出て、夜の道を歩いて行った。

瞳は濁った異様な光を放っていて、少女の容姿とは程遠く、その面影は薄い。

肩からオモチャのような鞆を提げていて、ポニーテールにまとめられた髪の毛が寂しく風になびいていた。

この少女の行方は、今もわからない。

唯一つはつきりしているのは、少女のいた家庭や近所で、少しの騒ぎにもなっていないということだ。

少女の家庭には変わらず一人の娘がいる。姉妹はいない。入れ替わった、という方が正しいかもしれない。

そして最近、どこかの街で、夕方になるとポニーテールの女の子が公園に遊びに来るといふ噂が流れている。

必ず暗くなる前の公園にやってきて、一人でシャボン玉を吹いて遊んでいるという。

「ねえお母さん。ボク、面白い話聞いてきたんだ。この前通った公園のお話」

「へえ、どんな？」

「夕方公園に行くといつも女の子がいてね、その子の名前、夕子ちゃんっていうんだ」

夕子ちゃんはね

夕方になったら空き地や公園に来て一人で遊んでるの
シャボン玉を吹い遊んでるんだよ

近くで遊んでたら一回だけやらせてくれるんだ

ボク一回しかやったことないからよく知らないんだけど

2回目からは嫌がってかしてくれないんだって

どうしてもやりたいって頼んだらかしてくれるけど

3回借りちゃったらもうここにはいられないんだって

ボクもこの前3回借りた子の家に遊びに行ったら

「そんな子うちにはいないわよ」って言われちゃった

どこ行っちゃったんだろう？

それといつの間にか自分の子供が変わるって噂もあるんだって

だから、夕方一人で遊びに行ったらいけない

夕子ちゃんに3回シャボン玉を借りちゃいけない

「だから、暗くなる前に帰りましようって、言われたんだ」

「まあ、そうなの。それじゃあ道草せずに真っ直ぐ帰ってこなきゃだめよ」

「うん！・・・」

そういえばその家の子
公園にいたシャボン玉の子に似てたな…
名前は確か…

夕子ちゃん…

(後書き)

ここまでありがとうございます。未熟者ですが、これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6634d/>

夕子ちゃん

2010年12月18日14時42分発行